カタクチイワシ（対馬暖流系群）

資料2－1

前年度（2025年度）評価結果から大幅に変更された主な理由

2025年データの更新

- 2025年の漁獲尾数は過去最低であり、特に0歳魚が非常に低い値となった
- 加入量や親魚量を反映していると考えられる資源量指標値も、2025年はすべて低い値となった

資源評価手法の変更

- 資源量指標値のうち、「長崎CPUE」については、有漁データ※のみを使って求めたCPUEから、全データを使って求めたCPUEへ変更
- 調査船調査による「仔魚密度」を新たな資源量指標値として追加

※ カタクチイワシが漁獲された操業データ



カタクチイワシ（対馬暖流系群）①

カタクチイワシは日本周辺に広く生息しており、本系群はこのうち東シナ海から日本海側に分布する群である。



図1　分布域

日本海では日本・朝鮮半島・沿海地方の沿岸域を中心に分布する種と考えられている。これに加えて、日本海の中央部や間宮海峡以南の北西部においても本種の分布報告があることから分布域は沿岸域から沖合域まで広範囲におよぶと考えられる。

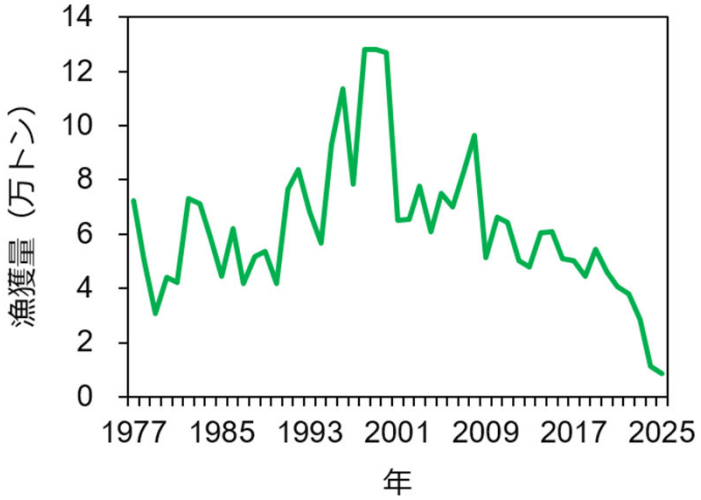


図2　漁獲量の推移

日本におけるシラスを除いた漁獲量は1990年代後半には10万トンを超えていたが、2004年には6.1万トンとなり、2005～2008年にかけて9.7万トンまで増加し、その後は2019年まで増減を繰り返していたが、2024年以降は急減し、2025年の漁獲量は0.8万トンであった。

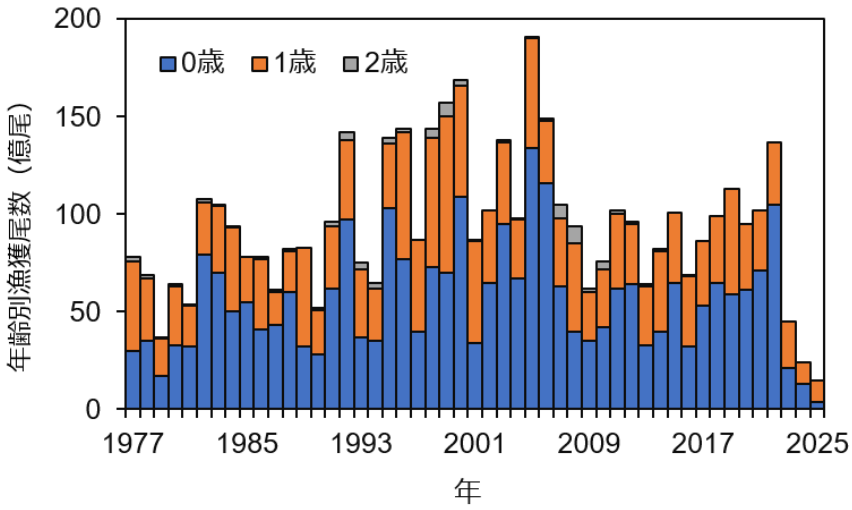


図3　年齢別漁獲尾数

漁獲尾数は0歳（青）、1歳（橙）を中心に構成されている（シラスは含まれていない）。2023年以降の0歳魚の漁獲尾数は大きく減少した。

カタクチイワシ（対馬暖流系群）②

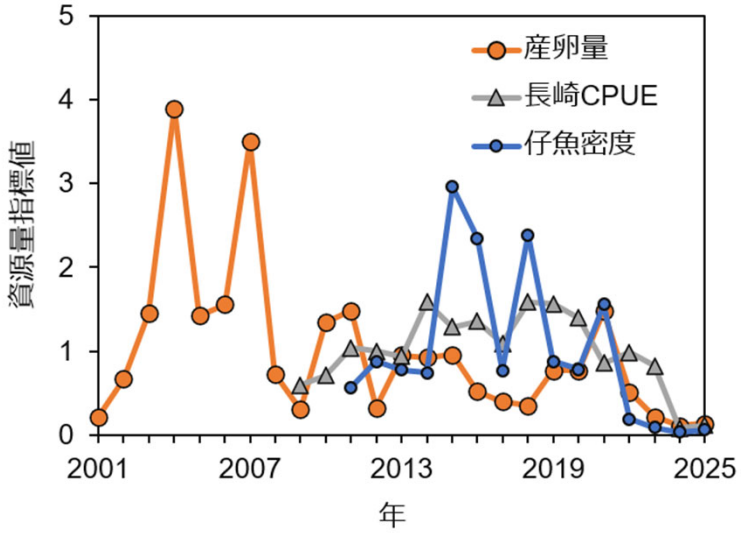


図4　資源量指標値

資源量指標値には、産卵量、長崎県における中・小型まき網の標準化CPUE（長崎CPUE）、東シナ海における仔魚密度を用いた。2025年はいずれの指標値も2024年から微増したが低い水準であった。なお、各指標値は全期間の平均値が1になるよう規格化した。

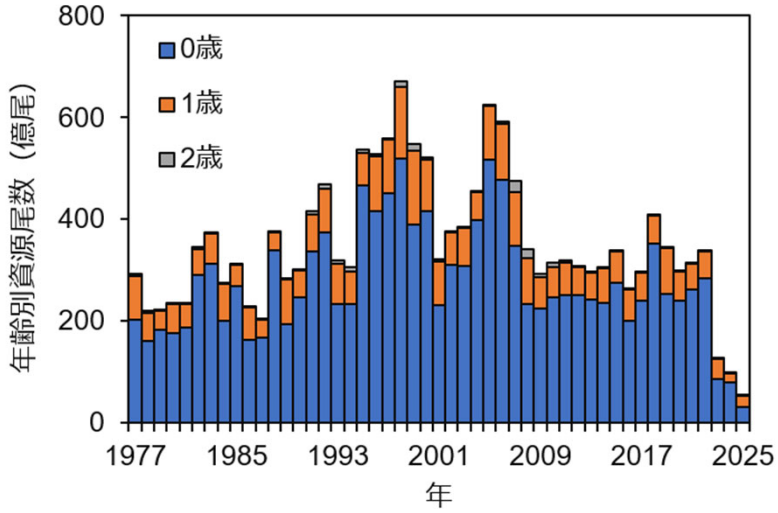


図5 年齢別資源尾数

資源の年齢組成を尾数でみると、0歳魚（加入量：青）を中心に構成されており、その数は2023年以降に急減した。

なお、0歳魚の資源尾数（加入量）にはシラスは含まれない。

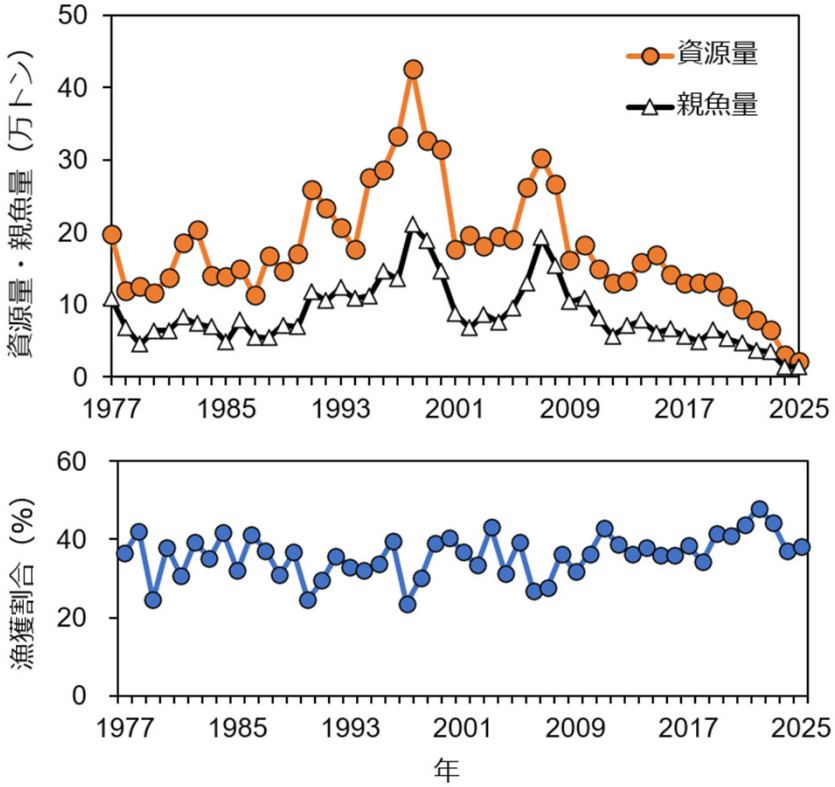


図6　資源量・親魚量・漁獲割合（%）

資源量は2016年以降、親魚量は2020年以降、減少傾向であったが、いずれも2024年に急減した。漁獲割合は2019～2023年において、41～48%とやや高い値を示していたが、2024～2025年は37～38%で推移した。

カタクチイワシ（対馬暖流系群）③

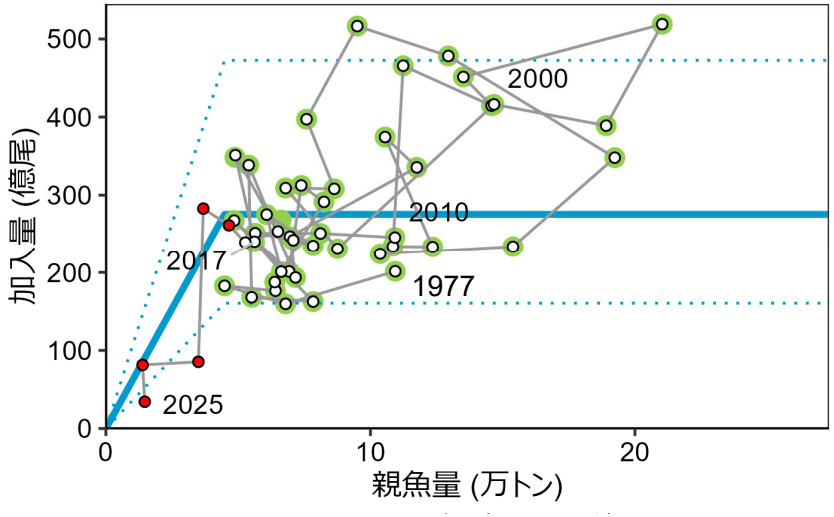


図６　再生産関係

1977～2018年の親魚量と加入量に対し、加入量の変動傾向を考慮したホッケー・スティック型の再生産関係（青太線）を適用した。青点線は、再生産関係の下で加入量の90%が含まれると期待される範囲である。

緑丸は再生産関係式を推定した時の観測値、白丸は2026年度資源評価において推定された観測値、赤丸は直近5年間（2021～2025年）の観測値である。

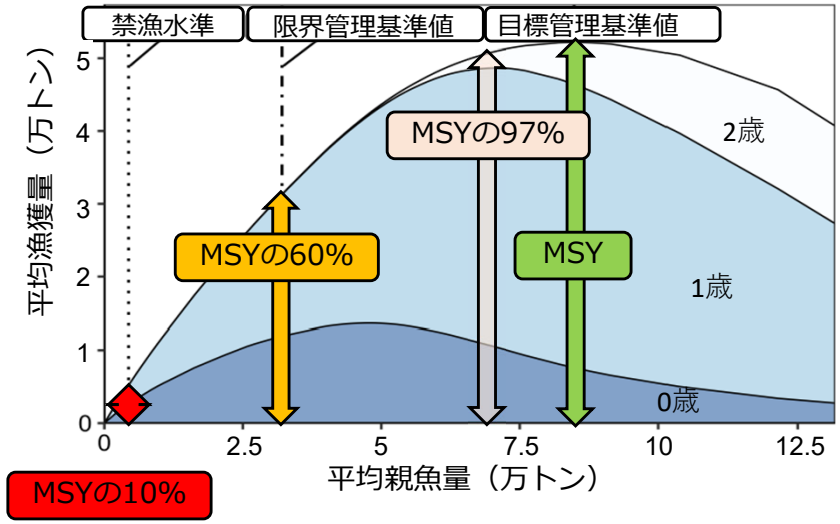


図7　管理基準値

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は8.4万トンと算定される。目標管理基準値は0～1歳魚のMSYを実現する親魚量（SB97%msy）、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

SBmsy	目標管理基準値（SB97%msy）	限界管理基準値	禁漁水準	2025年の親魚量	MSY	97%MSY	2025年の漁獲量
8.4万トン	6.8万トン	3.2万トン	0.4万トン	1.4万トン	5.1万トン	5.0万トン	0.8万トン

カタクチイワシ（対馬暖流系群）④

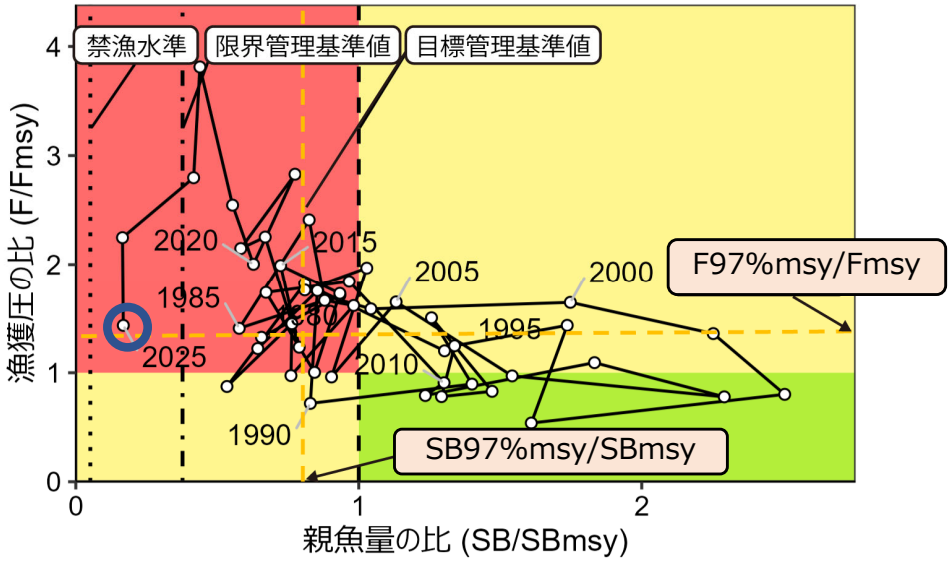


図8　神戸プロット（神戸チャート）

目標管理基準値である0～1歳魚の最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SB97%msy）のSBmsyに対する比と、SB97%msyを維持する漁獲圧（F97%msy）のFmsyに対する比を橙破線で示す。

親魚量（SB）は、2015年以降、SB97%msyを下回り、2025年の親魚量はSB97%msyの0.17倍であった。

漁獲圧（F）は、2017年以降、F97%msyを上回っており、2025年の漁獲圧はF97%msyの1.06倍であった。

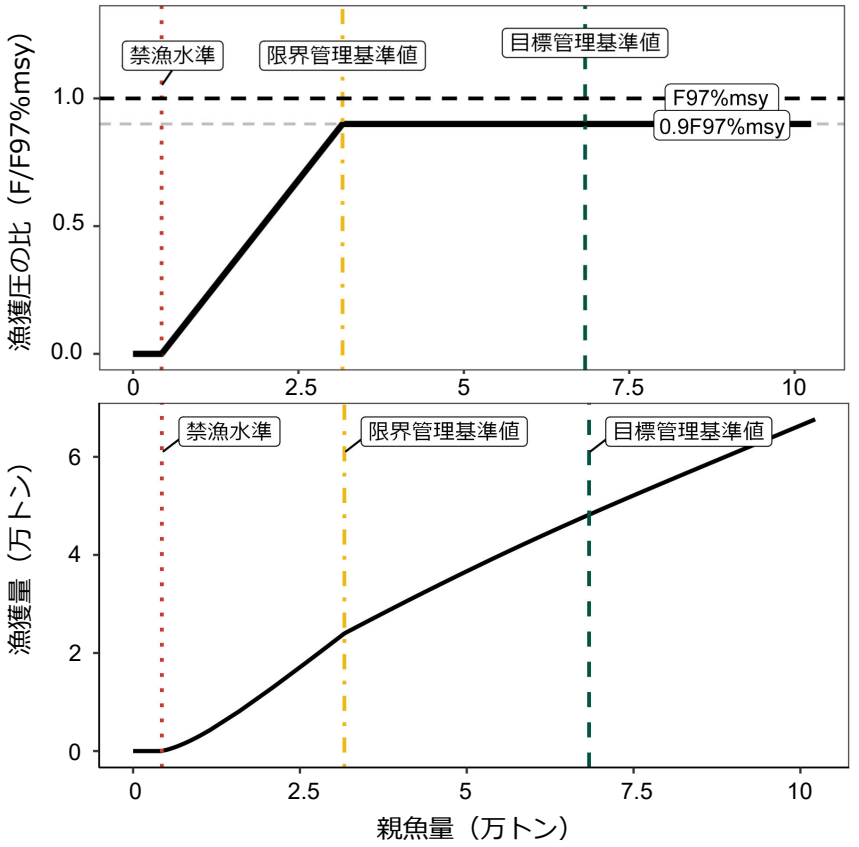
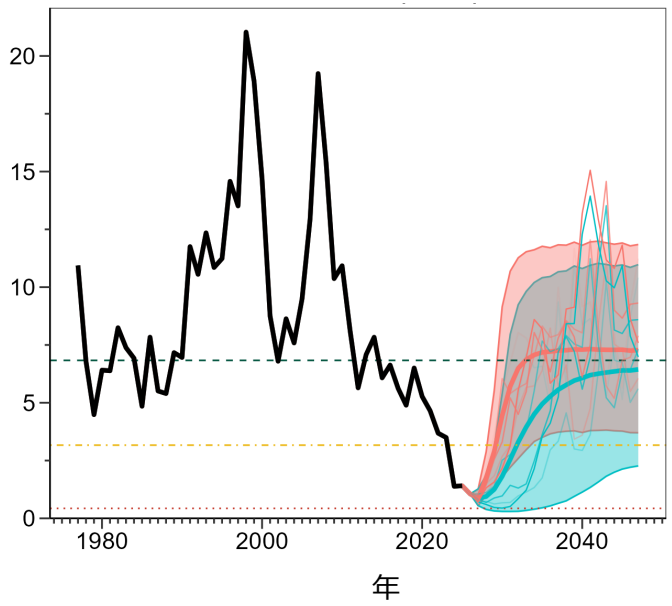


図9　漁獲シナリオ（上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量）

F97%msyに乗じる調整係数であるβを0.9とした漁獲シナリオを黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

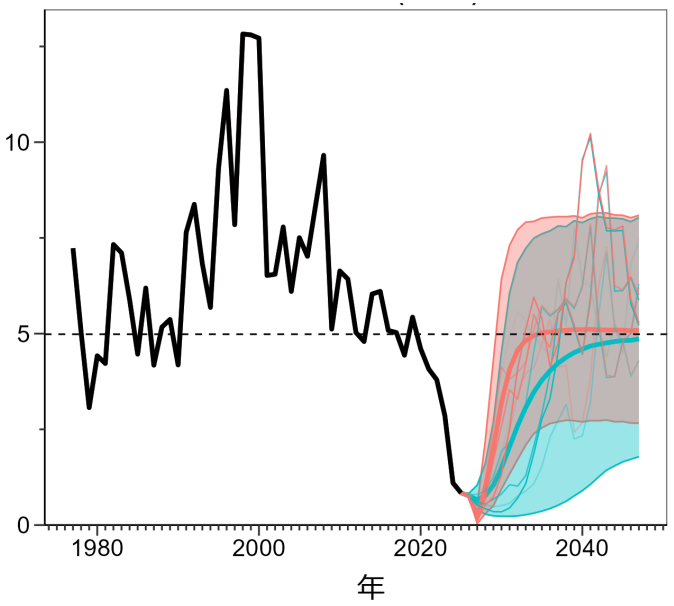
カタクチイワシ（対馬暖流系群）⑤

将来の親魚量（万トン）



SB97%msy
6.8万トン

将来の漁獲量（万トン）



97%MSY
5.0万トン

漁獲シナリオに基づく将来予測
（β=0.9）

現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

MSY

目標管理基準値

限界管理基準値

禁漁水準

図10　漁獲シナリオの下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

F97%msyに乗じる調整係数であるβを0.9とした漁獲シナリオに基づく漁獲を継続した場合の将来予測結果を示す。

親魚量の平均値は目標管理基準値よりも高い水準、漁獲量の平均値は97%MSY付近で維持される。

カタクチイワシ（対馬暖流系群）⑥

表1. 将来の平均親魚量（万トン）

β ×漁獲圧	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2034年に親魚量がSB97%msy（6.8万トン）を上回る確率
1.0×F97%msy	1.1	0.9	1.7	2.8	4.2	5.4	6.1	6.5	6.7	44%
0.9×F97%msy			1.8	2.9	4.4	5.7	6.5	6.9	7.1	50%
0.8×F97%msy			1.8	3.0	4.7	6.1	6.9	7.3	7.5	56%
現状の漁獲圧			0.9	1.3	1.8	2.5	3.3	3.9	4.5	24%

表2. 将来の平均漁獲量（万トン）

β ×漁獲圧	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
1.0×F97%msy	0.8	0.2	1.0	2.0	3.1	4.0	4.5	4.7	4.9
0.9×F97%msy		0.2	1.0	2.0	3.2	4.1	4.6	4.8	5.0
0.8×F97%msy		0.2	1.0	2.0	3.2	4.1	4.6	4.9	5.0
現状の漁獲圧		0.7	0.8	1.0	1.5	2.1	2.6	3.1	3.5

F97%msyに乗じる調整係数であるβを0.9とした漁獲シナリオ（赤枠）に基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。2026年の漁獲量は、現状の漁獲圧（2025年と同等：β=1.08相当）から予測される0.76万トンと仮定した。
この漁獲シナリオに従うと、2027年の平均漁獲量は0.22万トン、2034年に親魚量が目標管理基準値を上回る確率は50%と予測される。併せて、βを0.8～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧を続けた場合の将来予測結果も示した。

表3. ABC要約表

2027年のABC（万トン）	2027年の親魚量予測平均値（万トン）	現状の漁獲圧に対する比（F/F2025）	2027年の漁獲割合（%）
0.22	0.86	0.40	12

注：表の値は今後の資源評価により更新される。

前年度（2025年度）評価結果からの変化とその要因（カタクチイワシ対馬暖流系群）

ポイント
- 2025年の漁獲尾数は過去最低であり、特に0歳魚が非常に低い値となった（図1）
- 加入量や親魚量を反映していると考えられる資源量指標値※1も、2025年はすべて低い値となった（図2）
- これらのデータに基づき評価した結果、2025年の加入量と親魚量は、前年度評価よりも低下し、2025年の加入量は過去最低となった（図3）
- 2025年の低い加入量や親魚量にともない、2026年以降の将来予測における加入量・親魚量・漁獲量なども前年度評価よりも大幅に低く見積もられた（図3、2027年の平均漁獲量：3.1万トン→0.2万トン※3 ）

※1 本系群では、以下の3つの資源量指標値を使用
- 長崎CPUE：長崎県の中・小型まき網の1日1隻あたりの漁獲量（CPUE）であり、加入量を反映している資源量指標値として使用
- 産卵量：調査で採集された卵数であり、親魚量を反映している資源量指標値として使用
- 仔魚密度：調査で採集された仔魚数であり、加入量を反映している資源量指標値として使用

※2 2027年のABC

データの更新および変更
- 資源量指標値※1のうち、長崎CPUEについては、有漁データ※3のみを使って求めたCPUEから、全データを使って求めたCPUEへ変更
- 仔魚密度も、新たな資源量指標値として追加
- これらの資源量指標値の変更や追加も、前年度評価結果からの変化に影響

※3 カタクチイワシが漁獲された操業データ

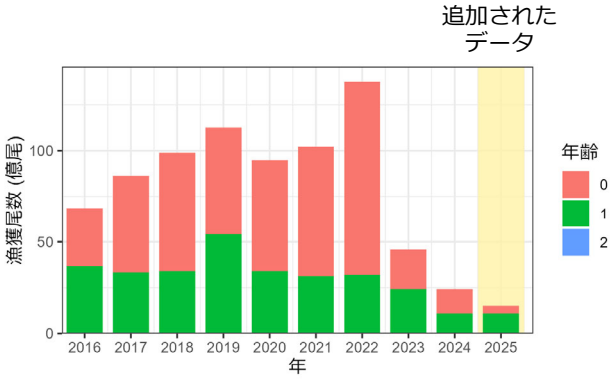
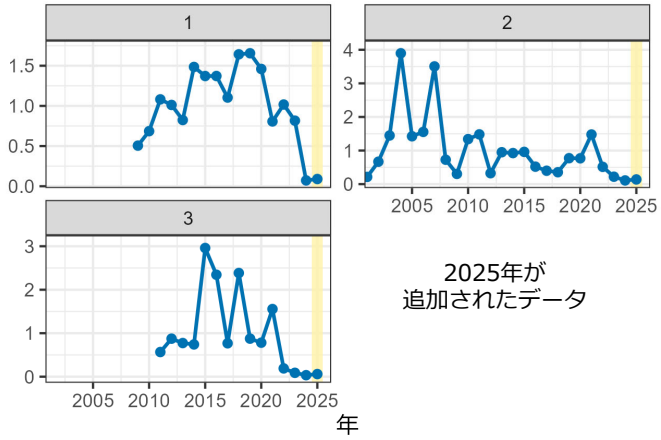


図１　年齢別漁獲尾数



2025年が
追加されたデータ

図2　資源量指標値
1 ：長崎CPUE、 2 ：産卵量、 3 ：仔魚密度
縦軸は平均が1となるように規格化した値

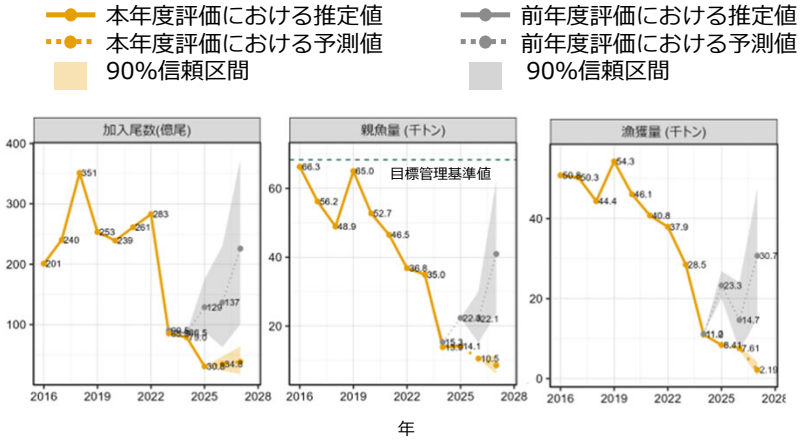


図3　本年度（2026年度）と前年度（2025年度）の評価結果

2027年のABC：本年度評価における2027年の平均漁獲量
2026年のABC：前年度評価における2026年の平均漁獲量
前年度評価における2025年の漁獲量は近年の平均的な漁獲圧に基づき算出
本年度評価における2026年の漁獲量は2025年の漁獲圧に基づき算出
前年度評価における2026年以降の漁獲量および本年度評価における2027年の漁獲量は漁獲シナリオに基づき算出

カタクチイワシ資源急減に至る状況整理

下記に挙げる複数の要因が連続的に作用し、2024年に資源が急減したと考えられる

2010頃～ 2021 2022 2023 2024 2025

実際の調査・漁獲などから分かっている結果



- 韓国漁獲量のゆるやかな減少
- 日本海北部から漁獲量減少
- 産卵海域の縮小
- 冬季の高齢魚の来遊の減少
- シラス漁獲量が過去最低
- 調査による仔魚密度が急減
- 東シナ海におけるマイワシ資源の急増



- 産卵親魚の分布・回遊が変化した可能性
- 再生産力が低下した可能性
- CPUE・漁獲量の急減



資源評価から把握される資源の変化



- 漁獲圧のゆるやかな上昇



- 漁獲圧の急上昇
- 加入量の激減



- 資源量・親魚量が徐々に減少



- 資源全体の急減



※上記は現時点で整理された情報に基づく仮説的な経緯であり、今後の調査・研究により検証していく必要がある。